

実践事例 ②

「考え、吟味して、意見を述べる力」を育てるための試みを

「サクラソウとトラマルハナバチ」(5年)

秋田市立金足西小学校 石井 淳

1 読み取った内容を再構成する場を設定する

再構成という難しく感じるが、子どもがテレビなどで見聞きしたニュースを、友達に自分の口から伝えることも、広い意味では、入手したニュース情報を再構成して人に伝えていくことになる。

教材文「サクラソウとトラマルハナバチ」(五年上)から要旨を読み取り、その内容をひとまず押さえて(インプットして)から、それを別の形に再構成してアウトプットする学習活動を考えた。その具体的な手法として、「テレビのニュース番組作り(模擬)」という出力方法を選んだ。

筆者へ感想や質問の手紙を書く、クイズ問題にしてクラスで出題し合う、壁新聞にまとめる、パネル・ディスプレイを組むなど、この種の実践事例は多く目にする。文字表現と音声表現の違いはあっても、これらの活動に共通するのは、読み取った内容をよく考えながら自分なりの表現力を駆使して「書き換え」ていく作業が必要になってくることであり、本実践でも、これは同様である。

2 再構成するための学習シートを工夫する

「テレビ番組を作る」という活動自体に、子どももの興味・関心を引き寄せる力がある。ビデオ撮影も、高学年であれば、少しの助言で子どもたちだけで操作ができる時代である。子どもたちは、進んで活動に取り組むであろう。

しかし、ビデオ撮影機器の操作は手軽になっても、収録

子どもたちがニュース番組作りを模擬的に進めていく際には、学習シートに、ニュース原稿やアナウンス原稿を書き込みながら「考え」「吟味して」「いけるように構成した」。そして、テレビ番組という舞台の場を借りて、自分たちの「意見を述べる」ことに集中できるように作成した。

テレビ番組作りという作業は、前掲の番組構成表からもわかるとおり、全体構成やインタビュー計画、専門家の選出、効果的な人選(配役)など、高学年の子どもたちにとっても、かなりの準備や試行錯誤が要求され、時間もかかる。本実践の段階においては、これらすべての要素について取り組ませることを避け、原稿作りに集中できるようにした。

また、本実践による学習活動は、二学期の単元「ニュース番組作りの現場から」(五年下)にダイレクトにつながっていく。自分たちで選んだテーマや問題を取り上げた番組作りを進めていく際に、本実践の学習経験が大いに役立つことになる。

3 指導の実際

■指導計画(全六時間)

- 第一次 学習の見通しをもつ。(一時間)
- 第二次 文章の内容を的確に押さえながら全体の構成をつかみ、要旨を伝えらる。(二時間)
- 第三次 教材文から読み取ったことをもとに、ニュース番組作りをする。(三時間)

する内容がお粗末であったなら、ただの「撮影っこ」に終わってしまう。テレビというメディアのよさを生かしながら、どのように伝えると教材文から読み取った内容を効果的に伝えられるのかを、十分に「考え」「吟味して」「いくこと、さらには、自分なりの言葉で「意見を述べる」活動が保障されなければならない。

そのために、ここでは学習シートを作成し、活用してみたい(P15参照)。五年生一学期の単元なので、かなりの部分を教師側で組み立てた。ニュース番組作りに必要な場面構成や起用する登場人物などは、以下のように教材文の構成に対応させながら、教師側でお膳立てしてある。

番組の場面構成(A・S・H)とタイトル例	対応する段落
問題提起 A サクラソウ、絶滅の心配	
B 証言インタビュー (地元の老人) C 証言インタビュー (育ててきた人)	
問題の解明 D 専門家(筆者)の解説(E・Fにも登場) E クイズ(受粉の仲立ちと受粉作戦) F すがたを消したトラマルハナバチ	
まとめ G 小学生へのインタビュー(感想・意見) H まとめ	5

■教材文の吟味を促す学習シートの活用法

第三次において、教材文をどのように吟味しながら学習を進めていくのか、その具体例を示したい。

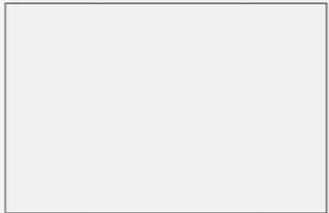
ここで言う吟味とは、ニュース番組の放送原稿作りという模擬的な場を借りながら、子どもたちが、教材文に再度目を通していく過程において、第二次で読み取った叙述内容を再確認することであり、さらに、その叙述の順序や内容が十分な根拠や論理に基づいているのかという確認をしていくことでもある。ここでは一例を挙げる。

キーワードやキーセンテンス、要旨を吟味する場の設定(場面Aを例に)
学習シート場面Aの原稿作りの際には、次のような問いかけが考えられる。

テレビ番組の最初では、番組タイトルが、パネルや画面上の文字でドーンと映し出されることが多くあります。みなさんが作る特集番組では、どんなタイトルがいいでしょう。場面Aの作業では、そこがポイントですよ。

子どもたちからは、次のような案が出される。

サクラソウの危機/サクラソウ救出大作戦/サクラソウが危ない/サクラソウを救え/サクラソウは今.../サクラソウは大丈夫なのか?/サクラソウ絶滅危機/守れサクラソウ/サクラソウをさがせ/サクラソウとトラマルハナバチのきずな...

B 中継	A スタジオ	場面 場所
		<p>絵コンテ：人物の位置などをおおよそのスケッチで描く。 (テレビ画面のイラスト)</p>
<p>この場面の役割 昔は群生地があった場所を実際に見る。証人の話を聞き出す。</p> <p>配役 ・記者A ・昔の様子を知る地元の人 ・教科書の群生地の写真</p>	<p>この場面の役割 番組全体の予告 テレビスタジオから番組を進めていく。</p> <p>配役 ・番組司会A ・番組司会B ・写真や自作パネルをカメラ前を出す係(道具係)</p>	<p>場面の役割 配役とその役割 分かりやすくするための道具</p>
	<p>◇◇くん A ○○くん B △△さん</p>	<p>セリフの分担</p>
		<p>下の見本を参考にして各場面の役のセリフを考え書いてみよう。</p>
		<p>◆司会が番組を進行するための原稿 ◆司会がゲストに質問するときの原稿 ◆ゲストが質問されたことを説明するときの原稿 ◆ロケ現場でレポーターがしゃべるセリフ ◆ロケ先で登場する役のセリフ ◆寸劇やクイズの台本</p>
<p>記者A はい、こちらです。 わたしは、○○市の田園地帯、○○という場所に来ています。</p> <p>地元のおばあちゃん</p> <p>記者A (取材後のまとめや感想)</p>	<p>司会A こんにちは。○○ニュース「○○」の時間です。 今日は、数十年前までは早春の風物詩でもなっていた、野生の花「サクラソウ」の話題を特集でお届けします。 題して「○○○○○○」。</p> <p>司会B まず、中継がつながっています。○○市○○に行っている、○○さんー</p>	<p>見本原稿(参考例) ※教科書の文章を利用しよう。 特に重要な語句は必ず使おう。 ※場面Bからは、場面をまとめるコメント(感想や呼びかけ)をいれながら次へつなげよう。</p>

▲ 学習シートの一部

この問いから導きたいのは、「サクラソウは、少なくともってきた」という事柄を裏づける証言やデータの提示の必要感である。本文は、植物学の専門誌ではないので、「少なくともってきた」というデータが提示されていないが、教材文

場面Bで、「地元の老人」を登場させて、記者がインタビューしています。教科書には出てきませんが、場面Bは必要でじょうか。

例えば、場面Bには、教材文に登場しない人物を配置している。この意図は何かを問うのである。

場面Bで、「地元の老人」を登場させて、記者がインタビューしています。教科書には出てきませんが、場面Bは必要でじょうか。

「われらを分類していくと、「危ない」という警告タイトルと、「守れ」という呼びかけ運動タイトルに大きく分かれていることに、子どもたちは気づく。

番組への注目度をねらって、「危ない」という危機感を強調するタイトルのほうへ支持が集まるかもしれない。

しかし、忘れてならないのは、筆者がいちばん伝えたいことは、何段落目にあつて、それがどのような内容なのかであり、そこに再度立ち返らせる必要がある。番組作りという再構成の場において、本教材文全体を貫く要旨を再吟味していくことが重要なのである。

叙述を裏づける根拠の吟味(場面Bを例に)
教師が提示した学習シートについて、子どもたちは無批判に受け入れて作業しがちになる。しかし、学習シート自体の吟味も部分的に扱ってよい。

の不備には当たらない。その点を理解しつつ、子どもたちや一般の人から見て、「本当にそうらしい」と思える証言やデータの提示が有効か必要かの吟味は、子どもたちにも納得できる事柄である。その後の様々な学習発表の際にも生きていく学習となるはずである。

以上の例のように、学習シートを扱う際には、常に教材文に立ち返ることを促していくように心がけたい。

■学習シートによる具体的な進め方

- 二つか三つの場面を数人ずつのグループで分担し、あとでつなぎ合わせる方法をとると、各グループ内での相談が進めやすいし、原稿も早くまとまる。
- 配役をまず決めて、各人物のセリフや原稿を、全部その担当者が考えていく方法もある。まとめるのに時間がかかるが、見る側にとっては見やすい番組となる。
- 学級を二つのグループに分けて、それぞれに違う台本を作り、互いに見せ合う方法もある。比較することが、自分たちの台本の吟味や、教材本文への立ち返りを促す。
- 台本原稿の書き込みの際には、番組を構成する各場面の「役割」を常に意識しながら、セリフをよく考え、教材文の叙述に沿いながら吟味していく(例えば、教材文の重要語句をセリフに入れるなど)ように助言する。
- 生放送という形にして、授業参観などの場で発表することも意欲づけに効果的である。ビデオ撮影したものを自分たちで鑑賞したり、校内放送に活用したりする方法もある。